
学校を壊そう！

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校を壊そう！

【Nコード】

N0850X

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

学生のテンションが20%減する定期テストの数日前。そんな時に、誰も一度は思わないだろうか。隕石が墜落して、局地的な竜巻が起こって学校よ壊れる！と。

これは、ちょっと不思議な高校に入学した女子高生、大久保絵美が友達(?)の三影涼子とともにその偉業を達成せんと行動するお話。

0話 始まりは演説から（前書き）

まずは破壊宣言から

0話 始まりは演説から

「学校を壊そう！」

昼休みの学校の教室。弾けるような笑顔で、壇上に立った彼女はそう言った。なんだなんだとそのクラスの注目を一瞬だけ集めた彼女は、澀刺と宣言した。

「お前らあ、こう思ったことはないかあ！」

昼休みという時間ということもあり、ざわついているクラスメイトに彼女はいつさい怯まない。長く伸びた髪を翻し、ばんつ、と黒板を叩き力説する。

「学校がウザい、めんどくさい、行きたくない、存在意義がわからないって、誰だって一度くらいは思ったことがあるだろう。授業って何の価値があるのって考えたことがないやつはいないだろう。教師ってなんなの奴ら何であんな偉そうなのって憤慨するのなんて日常茶飯事だろう？」

それに対する答えを教えてやる。やつらはあたしたちのことを金のなる木だとは思ってない！ 入学してからこの三カ月ばかりを思い出してみる！ あたしたちの貴重な時間を使つてのクソ退屈な授業！ ちょっと成績が悪いからってつまない授業しかできない自分の責任を棚に上げて説教！ 果ては校則という名の数々のロ―カルルールであたしたちの生きる道を邪魔する！ あいつらが見てるのはあたしたちじゃない！ あたしたちの後ろにいる保護者だ！ これを悪と言わずして、この悪を断ぜずについて一体何が正義か！ 警察は何やってんだ！ 繁華街で遊び歩くあたしたち補導するよ

りあっち取り締められよ！ 同じ公僕だからって、つるんでじゃねえよ！

なに？ 学校を壊すなんて無理？ いやいや、そんなことはない。もし、この学校がただの学校だったら確かに無理だろう。あたしたちは行動力は有り余っていても資金力のない高校生。この学校は仮にも先進国家日本での建築基準をクリアして建てられた建物だ。それをぶっ壊すのは、さすがのわたしにだって無理だと断言してやる！
でも！

でも、あたしたちの学校は、この七伏木高校はただの学校じゃない。みんなだっと思って思い至るところはあるだろう？ もう体感したって奴もいるはずだ。そう、あたしたちの学校には数限りない七不思議があるじゃないか！

ぐるととクラスを見渡し、元気よく手を差し出す。クラスの皆に、この手を取れと言わんばかりの吸引力をもつ笑顔で提案する。

「だから、みんな。このあたし、大久保絵美と一緒に」

大久保絵美は、クラスメイトの誰もが賛同してくれるだろうと、そんな確信に満ちた声音で言う。

「学校を壊そう！」

0 話 始まりは演説から（後書き）

ストックがないのでゆっくりな更新になると思います

『七伏木高校七不思議』

七伏木高校七不思議 七伏木高校七不思議研究部所属第五十三期部長相島美冬編集『七伏木高校七不思議調査ノート総集編』より目次を抜粋。

以下の七つが、七伏木高校の創立から終焉までを司る七不思議、『七伏木高校七不思議』である。

一、この学校は、七不思議を記した石柱と共に、史上の『最』たる七人によって創設された。

實在認定済み。調査記録詳細：P 11～P 12。

二、この学校の七不思議は、それが常識を越えたものであれ、実際に実在することがある。

實在認定済み。調査記録詳細：P 13。

三、この学校の七不思議は、学校関係者以外は知ることがない。

實在認定済み。調査記録詳細：P 14～P 18。

四、この学校の屋上には、幽霊の幸子さんがいる。

いうまでもなくみんな知っているとは思っけれども、幸子さんは實在認定されているわ。入学式に教わるこの学校の常識ね！第一期生が幸子さんの存在を確認している記録があつたから、学校創設当初から幸子さんは屋上にいたものと思われるわ。詳細はP 19～P 168。

簡潔にまとめただけだから別紙の『幸子さんノート』の参照を推奨するわ。あ、『幸子さんファンクラブ』に入っていなかったら速やかに加入するように！

五、この学校の七不思議は、数多く存在する。

實在認定済み。

現在確認されているものをすべて記録。記録詳細：P 169～P 212

六、この学校の七不思議は、時代と共に変化する。

實在認定済み。調査記録詳細：P 213～P 228

七、この学校は、理事長室にある学園模型が壊れると崩壊する。

創立五十五周年現在、未確認。

調査記録詳細：P 229～P 246

1 ここは平和なクラスです

七伏木高校の一年一組。

二か月ほど前に入学したばかりの新生四十名弱が所属する教室であり、良くも悪くも一年生の中で頭一つ目立ち始めている大久保絵美が所属するクラスでもある。

そしてその教室でさきほど行われた大久保絵美の力一杯の演説は

「でさあ」「えーまじい?」「いやあ、こないだ幸子さんとさ」「なにい!」「う、羨ましくなんてないんだからね!」「なんのツンデレだー」「てか、そりゃ嘘だろう」「あ、放課後部活あるんだよね」「それより、あいつバカだろ」「そつとしてやれ」「言つてやるなつて」「反応しちゃダメ」「調子に乗るからなー」「あ、俺こないだからバイト始めたんだ」「お、どこでだ?」「冷やかしに行くわ」「くんなつ」「しつかし」「あー、幸子さんに会いてえ」「オレもだ」「うちもだー」「ていうか、みんなでしょ」

ほとんど誰も聞いてなかった。

「てめら聞つけええええええええええ!」

真っ赤になつての叫びも、昼休みのわいわいがやがやとしたざわめきにかき消される。誰も構うことなどしなかった。

それはそうだろうな、と冷めた目のまま三影涼子は思う。

涼子は、絵美と同じクラブに所属している。だが、そんな付き合いはなくとも、絵美の性格を把握するのは難しくない。

マイペース至上主義を標榜する猪突猛進の大久保絵美は、自分の欲望のためならば媚びず、懲りず、省みない。涼子から言わせれば

ただの傍迷惑でうつとしい人種だ。人気はあるが人望はない。入学わずか二カ月で彼女が起こした事件の数々はクラス全員も知るところなので、少し騒いだところでいまさら誰も気にしていない。

そんなことを考えながら、涼子は席を立った。何の因果か、このクラスにおいて涼子は絵美のストッパー役と認知されているのだ。

絵美に近づく前に武器が必要かなと思い、文房具から適当なツール、コンパスを抜き出して装備するのも忘れない。

「ほお、てめら、そういう態度とるんだ。そおかそおか。よおつくわかった。なら、後悔するんじゃないぞ」

親愛なるクラスメイトから相手にされなかった絵美がぶつぶつと不穏なことを言い始めた。俯いているせいか、すぐ傍まで寄ってきた涼子に気がつかない。

絵美うざいなと思いながら涼子はコンパスを持った手を振り上げ

「てめらにあたしの恐ろしさを思い知らしてくれ」

「えい」

無造作にそれを振り下ろした。

「うおう!？」

ぎらりと鈍い光を反射して迫る五センチほどの針。情け容赦なく首筋をねらったそれを、絵美は無駄なくらい大げさな動作でかわす。残念ながら外れてしまったコンパス針の勢いは止まらず、ガツツと凶悪な音を立てて教卓に突き刺さる。

「ちょ、おま、涼子……いきなり」

外してしまっただか。残念。そう思いつつも、教卓に刺さったコンパスを引き抜く。根元近く埋まったそれをあっさりと引き抜き、口をぱくぱくさせている絵美に話しかけた。

「ねえ絵美」

「な、なんだ、涼子？」

涼子はあくまで理知的に、淡々とした口調で語りかける。絵美がやや怯えている原因は涼子の手の中で鈍い光を放っているコンパスが原因だろうか。

「学校を壊すなんて犯罪行為の宣言を、平和で平凡なこの一年一組でしないでちょうだい。物騒なことこの上ないわ」

「物騒なのはお前だ涼子！」

涼子の言い分ももつともだが、訴えを返した絵美の言い分もまたもつともである。

「平和で平凡なクラスだつて主張したいなら、人の頭にコンパス振り下ろすんじゃねえ！ そっちのほうがよっぽど物騒だよ！」

「テロ発言よりましよ。コンパスの針じゃ、人は死なないわ」

「基準がおかしいだろうが！」

「うるさいわね。そもそも何で学校を壊したいのよ」

わめく絵美をごく自然にスルーして、疑問をぶつける。さっき学校がどうだの言ってたが、それは建前だろう。ある程度気持ちがいこもっていたとはいえ、それがすべてだとは思っていない。

「ああ、そりゃまあ、ちゃんとした理由があるよ」

「何よちゃんとした理由って」

それに、絵美はあっけらかんと答える。

「テストがあるから」

「……？」

確かにそろそろ涼子達が高校生になって初めての定期試験が始まる。しかしだからなんだというのだろうか。それがちゃんとした理由とやらに、どうつながるのだから涼子には理解できなかった。

「いいか、涼子。あんたはこういうことを考えたことはないか？」

不審を表情に浮かべる涼子に、絵美はぐつと握りこぶしをつくった。

「テスト、ああ憂鬱だ。学校なんてなくなればいいのに。局地的な大地震が、竜巻が、台風が、大津波が、隕石が落ち天変地異のハルマゲドンが発生して学校が崩壊しないかって！」

「ない」

「なっ」

顔を突きつけて求めてきた同意をばっさり切り捨てる。涼子の即答に絵美は驚愕の表情を浮かべたが、知ったことではない。彼女の個人としては、天災よりかはテストのほうが平和的でいいと思う。

「涼子……お前、高校生じゃないよ……！」

バカが慄いていたが、無視する。涼子は日ごろから授業を聞き、家で一時間程度復習しているので、試験勉強などしなくても三十以内には入れるのだ。いまさらテストが憂鬱だなどとはやくはずもな

い。

「で、テストがどうしたって？ 何がちゃんとした理由だって言うのかしら？ 少しはわたしに共感を覚えさせられるようなこと、言えるのかしら？」

「うつさい！ あたしはねえ、学力がさも人間の物差しであるかのように決めつけているこの学校の風潮が大っ嫌いなんだ！」

「バカじゃないの？ 学力は立派に物差しのひとつだから。どの学校もどの地域もどの国も、学力を人間のものさしのひとつに使ってるわよ。あんたのはただの負け惜しみよバーカ」

「だから！」

「人の話聞けやこら」

「学校を壊そう！」

再度握りこぶしを作ったの力強い決意表明。

涼子は諦めのため息をひとつ。もうどういつても無駄だと諦め、絵美の話にだけでも付き合ってやることにした。

「学校を壊そうってなによ。あんたは爆薬を大量に隠し持ったテロリストか。それとも摩訶不思議な破壊アイテムを隠し持った宇宙人だったり、天変地異を引き起こす魔女だったりするわけなの？」

「バツカだな涼子」

「ああ」

バカにバカにされた涼子のこめかみが、ビキリと音を立ててひきつった。意外というほどでもないが、彼女の沸点はかなり低い。

「あんたケンカ売ってるのかしら？ 買うわよ？ お金であんたの殺害許可もらえるなら、買うわよわたしは？」

「いやいや、涼子、違うって。そういうことじゃなくてさ、考えて

みなよ？ 爆薬ってあんな、あたしたちはサバゲー部か？ それとも未来道具開発研究会だったり魔女っ子同好会だったり鬼っ子探索隊だったり模造スパイ部だったりしたっけ？」

「この学校の部活動の六割はなくなっただろうがいいわよね……」

づらづら並べられる部の名前に、涼子は思わず本音を漏らす。この学校に日本の終末を感じさせる名前の部活動が乱立しているのは、入学して二カ月としない新入生でも知っていることである。

「そう、違っだろう！ たしかにあたしは中学時代にサバゲー部だったけどそれも過去の話だ！」

「あんた中学の頃サバゲー部だったの……？」

そういえば少し前に部員を巻き込んで学内サバイバルゲーム大会を開催していた。ただ主催者たる絵美は、笑顔の綺麗な素敵な部長にゼロ距離から頭を撃たれて早々に敗退していたので、気まぐれに企画しただけで経験者だとは思っていなかった。

「涼子！ あたしたちの所属する部は！」

「七不思議研究部」

別段隠す事でもないものであっさり言う。まあ、このバカと一緒に部活というのは、いささか恥のような気もするが、絵美がいる前から七不思議研究部は存在するのである。絵美が所属しているからと言って、その価値が損なわれるようなことはないはずだ。

「そう！ 七不思議研究部略して七研部。そして我らが『七伏木高校七不思議』その七は！」

「確か……理事長室にある学校のミニチュアを壊すと、学校が崩壊する」

うむ、と満足げに絵美はうなずいた。

1 ここは平和なクラスです（後書き）

教卓に穴があきましたー

2 前準備をします

「で、あんたは校長室にある学校模型を壊そうっていうのね」
「その通りだよ涼子」

絵美と涼子は自分たちが所属する七研部の部室のすぐ近くまで来ていた。まだ昼休みが終わるまで余裕はある。
さきほど絵美の言っていた七不思議の詳細な情報を得るためだ。いきなり校長室に特攻をしかけるほど絵美もバ力ではないらしい。

「七不思議の情報は、全てここ、七研部に集まるからね！」

芝居のかかったふざけた口調を恥ずかしげもなく使い、絵美が部室の扉に手をかける。

だが涼子は、その行動に眉をひそめた。

「あ、ちよつと絵美」

手を伸ばして制そうとするが間に合わない。がらりと勢いよく絵美が扉を開いてしまう。

「この部室が、我らが七研部」

「ひ、ひひひ、ひゃっはは、ひやははははは！ ついに、ついに完成したわ！ 長年の夢だった完全人型ロボットSAKURA-？が！ ひやはっ。素晴らしいわ、この人と区別がつかないフォルム！ 私の深遠なる頭脳が生んだ、自立思考を可能とする結晶回路！

そしてなにより心臓部分に埋め込んだ、動力とお約束の自爆装置！
まだ起動テストは済んでないけど、間違いなく史上最高傑作だわ！
これで私はとうとうあのクソ祖父を越えることがあ

「いつけねえ部屋間違えた」

絵美は何も見なかったことにして、扉を閉じた。

「……………」

同じく見てはいけないものを見てしまった涼子は完全に無言である。

絵美は失敗失敗、とばかりに笑って

「ここ向かいの未来道具開発研究会だったわ。やー、あんま部屋行かないから、たまに間違えちゃうんだよな。我らが七研部は、こつちだったこつち」

「……ねえ絵美」

何事もなかったかのように振る舞う絵美に、涼子はぼつりと訊いた。

「明日辺り、クラスに転入生とかきたらどうする？」

「仲良くする。ちょっとロボっぽいところがあつたとしてもあたしは差別したりしない」

「そっか。じゃあ、私もそうするわ」

お互い、真面目な顔で頷きあう。まさかそんなことが、と言えないのがこの学校の恐ろしいところだ。

そうして絵美は、今度こそ正しい部室の扉を開けた。

涼子と絵美が通う七伏木高校の七不思議は、特殊である。

ただの七不思議だけならどこにでもあるだろう。生徒たちが面白がり、噂をし、そうしてつくられていくのが健全たる七不思議というものだ。

だがここ七伏木高校の七不思議は勝手が違った。七不思議があまりにたくさんある。馬鹿みたいにたくさんある。ありすぎだろうと全校生徒が思うくらいあった。それって七不思議って言っているの？って言われるくらいたくさんあった。

まずもつとも基本たる『七伏木高校七不思議』から始まり『昼の学校七不思議』、『夜の学校七不思議』がある。この三つの七不思議から始まり、その他に季節ごと行事ごとの七不思議。また各施設各部活ごとにもそれぞれ七不思議を持っている。そして七伏木高校は戦前からあり、第一期生から五十二期までに渡る卒業生を輩出している。その五十二学年全てがそれぞれ七不思議を持っている。またいま在学中の三年生は五十三期生七不思議を作り終えており、二年生たちは五十四期七不思議を半ば以上作成、涼子と絵美たち一年生も五十五期七不思議の第一条が定着した。

そして、摩訶不思議なことに七伏木高校の七不思議は実在するものも多かった。また七不思議には学校の怪談的なものも多く含まれるため、危険なものもある。生徒を殺すような七不思議はさすがにまだ観測されていないが、廊下で感電したりプールで溺れたり校庭に埋まったり教室に閉じ込められたりした生徒は数多い。

そういった危険な七不思議はきちんと調査されるべきである。そ

れら多くの七不思議の实在の有無を確かめ、その変遷を記していくのが涼子たちの所属する七不思議研究部なのだ。

七研部は七伏木高校のなかでももっとも歴史が古い部のひとつである。部室には大抵、人がいる。

部室には、今日も人がいた。

「あら、絵美ちゃんに涼子ちゃん」

七不思議研究部の部長だった。大人っぽい美人で、笑顔が綺麗で素敵な三年生である。

部長は昔に記された七不思議実地調査のノートを何冊か広げ、その内容をまとめてパソコンに打ち込んでいる。この上なく面倒で時間がかかり、そのくせ見返りのない作業だ。定例会以外の活動が義務付けられていない七研部でそんな作業に従事する人は少ない。

彼女は編集作業の手を休め、おっとりした口調で語りかけてくる。

「どうしたの？ 何か調べ物？」

「部長。学校を破壊したいんです！」

絵美が勢い込んで言うと、部長はぱちくりとまばたきをした。

「破壊？ 学校を？」

「そうです」

「あらあら」

絵美の突飛な発言にも、その笑顔は微塵も揺るがない。穏やかで品のある人だが、それだけではない。なにせ、クセモノ揃いの七研部員から認められ、また彼らをまとめ上げているのだ。彼女がちょっとやそつとでは震えない胆力を備え、あらゆる状況に適応する頭の柔軟さと回転の早さを持ち合わせていることは、七研部の部員な

らばだれもが知るところである。

「でも、なんで学校を壊したいのかしら？」

絵美はにやりと笑った。

「テストがあるからです！」

「あら」

ぷつ、と部長が吹き出した。涼子の時とは違い、それだけで絵美の真意を察したらしい。

手を口に当て、堪えようとしたみたいだが

「あら、あら、あら」

それは叶わず、肩を震わせくすくすと笑う。おかしくってしょうがないという様子だが、決してバカにした笑い方ではない。

ひとしきりそうして

「うふふ。いいわよ。今から該当する七不思議のデータをだしてプリントアウトするわ」

「あいさつ。感謝します、部長！」

「バカがご迷惑おかけします」

絵美は立ち上がって、冗談っぽく敬礼する。付き添っていただけの涼子も、一応頭を下げる。

「データを出すのにちよつと時間がかかるから、そのの辺りにある資料でも読んで時間を潰してくれるかしら」

七研部にはいままで調べられた七不思議の調査資料が蓄積されているのだ。絵美たちは部長の言葉に頷いて、ノートが並んでいる棚に向かった。一冊適当に引き抜いて、ぱらぱらとめくる。

「第五十三期生七不思議。ふうん。その一。『相島美冬つて某国のスパイなんだつて!』……? その二。『一年の時の修学旅行でツチノコを目撃したとかしないとか!』……? その三。『立創院律子はマッドサイエンティストに違いない!』……? その四。『屋上の幸子さんに告白した男子生徒は百人を越えた!』……?」

「絵美、なにこれ?」

「さあ?」

「それは私たち三年生の七不思議『第五十三期七不思議』ね」

疑問符を上げる涼子と絵美に、説明の声が入る。涼子たち一年にはまだあまり根づいていないが、七伏木高校では、それぞれの学年固有の七不思議が作られていくのが伝統なのだ。

「たまに全部決まらない年もあるから、私たちは卒業前に全部決まっただけよ」

パソコンを操作する手を休めず、丁寧に説明してくれる。

「いやでもこれ……なんか適当じゃありません? しかも七不思議って言うより、なんかゴシップ記事の見出しみたいな感じですし」
「学年七不思議は、毎年そんなもののよ。卒業までに七つそろえることこそが重要なもの。だいたいが面白半分の嘘っぱち。スパイネタなんて三年に一度は使いまわされているし、幸子さんへの告白人数なんて毎年よ」

涼子の指摘に、苦笑交じりで続ける。

「でも、それでいいの。七不思議って、本来そういうものでしょう」

実在するからこそ語られる摩訶不思議な七不思議ではなく、実在せずにただの噂と憶測で語られ形作られる七不思議こそが、卒業した後も自分たちの記念になる。そういわれてしまえば、実感はななくとも頷くしかない。

「まあ、そうかもしれませんけど」

「個人名も多いから、中傷にならないように冗談っぽくしてるの。そういえば、あなたたち一年生の五十五期生七不思議は、もうその一が決まったのよね？ 『一年一組の破壊の預言者』だったかしらうふふ。カッコよくって羨ましいわ」

「ええ、まあ」

涼子は曖昧に言葉を濁した。ちなみに栄えある五十五期七不思議のその一を創ったバカ女は、退屈そうに部室をうろろしている棚を見ている。

「そういえばここに載ってる立創院律子って、向かいの未来道具開発研究会の人でしたっけ？」

「ええ、そうよ。三年になってあそこの会長をやってるわ。私、彼女とは一年の頃から同じクラスなのよ。律子ったらたまに爆発とか起こすから、ちょっぴり迷惑なのよね……でも、よく知ってたわね？」

「知ってたわけではないんですが、ちょっとここに来る前に……いえ、何でもないです」

部長の問いから逃げるように言葉をにぎす。いくら相手が理解力のある部長とはいえ、ロボットな転入生がくるかもしれないんです、などと話すわけにもいきません。

「そう？ …… うん終わったわ。 絵美ちゃんもおいで」
「あいつさー」

部長が手招きする。興味深そうにノートを読んでいた絵美は、大人しく寄ってくる。

「はい。これが学校を破壊しうる七不思議よ」

そういつて紙の束を手渡す。

「まずはこれ。 三大七不思議の一たる『七伏木高校七不思議』のその七」

「『この学校は、理事長室にある学校模型が壊れると崩壊する』」
「ええ」

にこりと部長が微笑む。

「これは残念ながらまだ誰も挑戦していない七不思議なの。『七伏木高校七不思議』の中でも唯一認定確認がされていないものだから、絵美ちゃんたちにはぜひともがんばってほしいわね」

その確認イコール学校の壊滅なのだが。それを承知しているというのに、さらりと裏のない笑顔で恐ろしいことを言う人である。

「でも、これに関しては保証がないわ。たとえ学校の模型破壊が成功しても、学校が壊れない可能性がある」

實在認定がされていないということは、それがただの噂話でしかないという可能性だってあるのだ。

「だから、これ」

とん、と指をさす。

「こっちは『夜の学校七不思議』のその七。『満月の夜に六つの七不思議を乗り越え屋上に辿り着くと、光り輝く幸子さんが願い事を叶えてくれる』っていうもの。これもまだ認定確認されていないものね。ただ、幸子さんの名前がが記述される七不思議が、実在しなかったことはないわ。だから、これが実在する七不思議なのは、ほぼ確実。この条件をクリアして幸子さんに頼めば学校を壊してもらえるかも知れないわ」

「なーる」

ふんふんと絵美が頷いている。なるほど涼子も感心する。さすが七研部の部長だけあって、七不思議に精通している。直接学校を破壊する七不思議だけでなく、こういった間接的な形で絵美の要望にこたえることができる七不思議まで出してくれたのだ。

「ただし、『夜の学校七不思議』は危険なものが多いから気をつけてね」

「危険？」

「ええ」

部長が悪戯っぽく笑う。

「『夜の学校七不思議』は三大七不思議にして最も謎が多い七不思議のひとつよ。なにせ、その半数も認定確認がなされていないもの。わたしの代も昔に行ったことがあるわ。同じ学年のみんなで徒党を組んで、わたしも夜の学校七不思議のその七が知りたかったから、

ね。満月の夜を見計らって学校に忍び込んだわ」

「へえ」

部長の言葉に興味をそそられる。

七不思議の調査活動は各個人、もしくは部活内で必要に応じて何人かで組んでやる。だが部長は編集作業を好んでやるものだから、実地調査にはあまり参加しない。その部長の数少ない実地調査の成果だ。気にならないわけがない。

「どうだったんですか？」

「悲惨の一言。第一の七不思議で大半が蹴散らされてしまったの。わたしも頑張ったんだけど、結局は虫が苦手なインドア派だから……」

部長は悲惨といったが、実はそんなことはない。涼子たちの知ることではないが、部長は『夜の学校七不思議』の到達最高記録を樹立している。

だがそんなことはおくびのもださず、部長はにっこり笑う。

「七研部にあるだけの情報は、いま渡した紙に書いてあるわ。だから、死なない程度にがんばってね」

素敵な笑顔でそんなことをおっしゃった。

3 目的を持ちます

屋上には幽霊がいる。

幽霊の名前を、幸子さんという。

彼女は七伏木高校の根幹を司る『七伏木高校七不思議』にも顔を出している重要な存在である。というよりか、数限りない七伏木高校の七不思議において、そのほとんどに彼女の名前がある。

なぜなら幸子さんは、七伏木高校にいる全ての存在から愛され敬われているからだ。

幸子さんは良い人である。様々な相談話を承る彼女は人望に厚い。ぼんやりとした人型でしかない彼女に恋する男子は十や二十ではきかず、百ですら収まらない。幸子さんと話した六割の男子は彼女に恋をすると言われている。また彼女の人気は男子だけでとどまりはしない。幽霊という性質上女子からありがちな嫉妬を買うこともなく、幸子さんと話した女子のリピーター率は『幸子さんファンクラブ』の詳細な調べによると九十二パーセントという驚異的な結果を出している。

そして彼女の人気は生徒の枠すらも超える。幽霊が故に教師陣の誰よりも長くこの世にいるだろう彼女は人生経験も豊富で教師からも頼られる。最近の教師はストレスを溜めて病む人も多いと言うが、七伏木高校の教員の辞職率は異常なまでに低い。

その結果、設立したのが『幸子さんファンクラブ』。七研部と同じく学校創設時から存在する『幸子さんファンクラブ』は恒常的に男女含めた全校生徒の八割が所属、教師の間では三つある顧問枠の争いが毎年熾烈を極めるといふ。

幸子さんがなぜそこにいるかは誰も知らない。一時期、七不思議

研究部が『幸子さんファンクラブ』と結託しその総力を結集して幸子さんの事を調べたことがあった。当時在籍していた部員はもちろん、歴代七研部のOBやOGや顧問の全員が「幸子さんのことを知れるなら」と尽力を惜しまなかった。各々の人脈を駆使した調査網は全校生徒の協力を得て、各業界の平社員から幹部役員、警察自衛隊裁判官政治家財界人などあらゆる範囲の上下横線を網羅したが、その総力を持つてしてもはかばかしい結果を得られなかった。

七研部に置いてある『幸子さんノート』を見ればその変遷がよくわかる。ちなみに学校の七不思議において幸子さんについての資料は群を抜いて膨大だ。七研部の部員は多くが『幸子さんファンクラブ』に所属している重度の幸子さんファンなので挫折するとわかってても調査する人間が多いのだ。結果、同じ様な内容のノートが毎年毎年何冊も生産されている。

誰もが憧れ誰もが好きになり誰もが手を伸ばすも誰もが彼女に触れることすらできない。

それが屋上の幽霊、幸子さんだ。

「うーん」

そして、放課後の教室で思い悩む、幸子さんの重度のファンがひとり。

「学校に忍びこむ、か」

涼子である。

実のところ今回涼子は、絵美に協力してやる気はこれっぽっちもなかった。勝手にやれバーカと思っていたがしかし、である。

幸子さんに会えるかもしれない、というならば話は別である。

「むっ」

先ほど部長から聞いた七不思議。その中に『六つの七不思議を乗り越えて屋上に辿り着けば』と記されていたのだ。逆説的に考えれば、六つの七不思議を乗り越えれば幸子さんに会えるということである。

普段、幸子さんへの訪問は『幸子さんファンクラブ』のさらに上位組織『幸子さん親衛隊』によつて厳正に管理されている。勝手に会いに行こうにも幸子さんの住まう屋上への扉は厳重にロックされている。ファンクラブから募った『幸子さん基金』より造りだされたかの扉は学校一堅固で高性能でついでもっとも高価な備品である。特殊合金製の扉に電子錠、扉の開閉は当然の如く自動式だが、誰がそうしたのか手動式の校長室の扉と同じ獅子を模った意匠のドアノブが付いている。一説にはこの扉を造る際に校長が「幸子さんとおそろいがいい！」と強固に主張したからという。うん。気持ち悪い。

ともあれ、幸子さんへと続く扉は電子錠によつてロックされている。そのパスワードは『幸子さんファンクラブ』のなかでもごくごく中枢の地位である『幸子さん親衛隊』によつて毎日変更されているため特定は困難だ。その日に面会が許されている人物のみ、幸子さんへの訪問の直前に明かされる。

だから、これはチャンスでもあるのだ。

「普通的手段では会えない幸子さんにお会いできる機会……！」

ならばいつでもいい、いや行くべきではないだろうか！

決心する。よし、行こう。そして学校への不法侵入の罪はすべて絵美におっかぶせよう。

そんな計画を立てながら帰り支度をしていると

「あたしは気がついたあ！」

がらりと教室に飛び込んできた人物がいた。言わずもなが、絵美である。

「昼は不便だ！」

「……人間の活動時間は昼よ」

いままさに帰り支度を始めていた涼子は、目の前の騒音にどう対処しようか迷った。

だがそんな涼子の逡巡を考慮せずに絵美はまくしたてる。

「校則に反するにも後ろ暗いことをするのも犯罪行為に及ぶのにも昼はだめだ！ どこもかしこも生徒がごった返してる！ そしてそこかしこに先生の目がある！ 昼に行動するということは衆人監視下であることを前提としている。だから夜に行こう！ 夜に校長室に侵入して学校模型をぶっ壊そう！」

どうやら校長室に入り込もうとして失敗したらしい。昼間は「涼子。身代り持ってきたから授業さぼって行こうぜ校長室！」とか、いい笑顔で人体模型とガイコツ標本を教室に持ち込んだから間違いないだろう。身代わりになるわけないでしょバカ、の一言で終わったが。ちなみに生徒の間では人体模型の山田君とガイコツ標本の花子さんの通り名で親しまれている。わざわざ理科室から運んできたらしいそれを戻していたために、絵美が授業に遅れたというのはお約束だ。

「ああうんわかったから家に帰りなさい」
「え？」

あつさりと了承した涼子に、絵美はぽかんと口を開いた。

「うそお。来てくれんの？」

「ええ」

やたら疑わしそうな言葉にあつさり頷く。

「え。なにそれ。罷？」

「何よ、失礼ね。友達の誘いだもの。受けるに決まってるじゃない。なにか都合が悪いの？」

「い、いや別に悪いってことはないんだけど……」

「ならいいでしょう。集合場所と時間はわたしが決めておいてあげるわ。どうせ、何も考えてないんでしょう」

確固たる目的があるために協力的な態度をとる涼子。

おっかしいな、と首を傾げている絵美は知らない。

涼子が、いざというときは犯罪行為をすべてなすりつけようと画策していることを、繰り返すが、絵美は知らない。

『夜の学校七不思議』

夜の学校七不思議 「相島美貴による第五十三期『夜の学校七不思議』調査ノート」より目次を抜粋

一、校庭に構える守護者。
遭遇。クリア。

調査詳細：P 2 ～ P 6

二、一階を巡回する人型。
遭遇。クリア。

調査詳細：P 7 ～ P 11

三、無限に続く二階への階段。
体験。クリア。

調査詳細：P 12 ～ P 14

四、二階で蘇る死者の群。
遭遇。リタイア。

調査詳細：P 15

五、三階は惑わす迷路。
未到達。

調査詳細：なし

六、排除する二つの扉。

未到達。

調査詳細：なし

七、満月の夜に六つの七不思議を乗り越え屋上に辿り着くと、光り輝く幸子さんが願いを叶えてくれる。

未到達。

調査詳細：なし……この為だけに行ったのに、残念。

『夜の学校七不思議』（後書き）

月1更新

さっそく一人リタイヤですか？

「さあさあ、やってきました夜の学校、やってきてみる夜の学校！」

夜。閉じられた校門の前で、絵美は雄々しく声を上げてびしっと立ち姿を決めていた。それを見守るのは、校門傍を飾るために設置してある六つの尾がある狐の石像と、その石像よりも冷たい視線の涼子だけだった。

涼子はため息をひとつ。

「はいはい、アホやってないでさっさと入りましょうよ」

「む、アホとはなんだ」

「アホだから学校を壊そうなんて思ったんでしょうが」

「いや、そうだけどさ……」

そもその原因がテスト嫌だという頭の悪いものなのだ。反論できるはずもなく、絵美はぶつぶつ言いながらも校門を乗り越える。どこからどう見ても不法侵入の泥棒である。

とはいえ夜の学校は、無人だ。七伏木高校は、夜に警備員を置いていない。またセコムなどに準じる警報などのセキュリティも設置していない。入るだけならば誰でも簡単に入れるのだ。

ただその代りに

「……」

「……ん？ どしたの？」

校門を超えた絵美が振り返る。涼子はなぜか校門の傍にある六尾

の狐の像をじいーつと見ていただけだ。絵美に続いて学校に不法侵入をしようとしなない。

「どしたの？ いまさら怖気づいたとか？」

涼子は絵美の挑発を無視して、ぽつりとつぶやく。

「夜の学校七不思議、その一……」

校門のわきに立っていた六尾の狐の石像が、がぶりんちよと絵美の頭にかじりついた。

「え？」

「校庭に構える守護者」

あまりの出来事に硬直した絵美を華麗に無視し、涼子は学校の門をひらりと乗り越えた。

そして、ダッシュ。

石像にくわえられている絵美のことなど無視して、ダッシュ。

「じゃ、頑張りなさい。それ、すごい強いらしいけど」

「おーい涼子、行っちゃうんかい……って、ぐぎゃあー！ 重っ！

何これ！ 六尾の像が動き出してる！？ は？ 何！？ 口を開いて……うぎゃーっ、火い吹いたあ！？」

何やら騒がしかったが涼子は一回も振り返ることはなかった。何の障害もなく工程を走りぬけ、事前に細工を仕掛けておいた窓までたどり着き、窓を不法に開ける。そのまま窓枠に手をかけて、ひらりと校舎に忍び込んだ。

「涼子、タースケーター」

遠くから、声が聞こえた気がした。
きつと気のせいだ。

「さらば、絵美」

涼子はおとりに使った友人に、冷然と別れを告げた。

三歩歩いたら忘れる鳥頭ですか

難なく第一の七不思議を通過した涼子は、それでも警戒を怠らなかった。『夜の学校七不思議』は息をつく間もなく襲ってくる。気など抜いたらすぐにその餌食となってしまう。窓から侵入すると同時に左右の確認。脅威が迫っていないか、身の安全の確保を優先する。

「ふう」

何もいないことを確認して一息つく。

涼子は部長からもらった資料の詳細をしっかりと読み込んだので、先ほどの石像が侵入者を排除するように動くのは事前に知っていた。だからこそ絵美を先に送り込み、おとりに使ったのだ。ちなみに、涼子が独占したため絵美はその資料を読んでいない。

「……」

涼子は慎重に進んでいく。夜なので当然真っ暗だが、さすがに不法侵入の分際で明かりをつけるような迂闊なことをする気はなかった。

廊下の灯りは非常灯ぐらいしかない。後は窓から差し込む月明かり、そして時折校庭で燃える紅蓮の炎の輝きだけだ。紅の光が瞬くたびに「うぎゃー！」とか「ひゃぴー！」とかいうお尻に火をつけられた猿みたいな悲鳴が聞こえた気もするが、気のせいに違いないとそれ以上の雑音を切り捨てた。そんな些事よりも備えなければならないことがあるのだ。

「来た」

かつん、かつんと廊下に足音が響いて反響した。その音が、だんだん大きくなる。

ここは夜の学校。常識的に考えるならば、巡回しているのは雇われた警備員か宿直の先生だろう。

しかし、ここは七伏木高校。常識の通用しない多くの七不思議が混合した類を見ない場所だ。ここに科学的な警備はなにひとつ施されていない。この学校は、非力な人間の監視など必要としないのだ。

夜の学校にあるのは、たった七つの不思議だけだ。

「夜の学校七不思議その二」

「夜の学校は立ち入り禁止だ。大人しく出ていけ」

「一階を巡回する人型　！」

廊下の暗がりから現れたのは人ではない。みんなの友達、人体模型の山田君だ。

無機質な、全裸の人形がやたら滑らかに動いて、しゃべっている。何ともシュールな光景だ。

「繰り返すぞ。夜の学校は　む」

「つつさいわよ無機物」

脱兎のごとく逃げ出した涼子に、山田君の警告が止まる。

「警告を無視するか……愚か者め」

「愚か者とはご挨拶ね……」

無然と呟きつつ涼子は止まらず角を曲がる。相手にする必要もな

い。この廊下を少し走れば二階へ続く階段なのだ。
しかし。

「っ」

涼子はかかとで急ブレーキをかける。

「ガイコツ標本の花子さん……!？」

かたかたと顎の骨を揺らして笑うガイコツ標本が道を塞いでいた。
一体ではなかったのか、と自分の見通しの甘さを悔やむがもう遅い。
かつん、という足音。振り返れば山田君が追いついてきていた。

「さて、どうする？」

かたかたかた。

後ろから迫る山田君、前に立ちふさがる花子さん。

子供ならば泣き出してしまいそうなシュールな光景に、涼子は顔をしかめる。

だが涼子に焦りはなかった。

「うるさいわね……いまは絵美も見えてないし、あんたらごときわたしのま」

すつと絵美が手を上げた瞬間、大音響とともに地面が揺れた。

ずどん、と大砲が地面に着弾したときのような重低音。一瞬だけ校舎を揺らしたそれはすぐに収まった。

「！」

「な、なんだっ？」

どう考えても地震ではない。見るにどうやら山田君が原因でもないようだ。

ならばいったいなんだ、と涼子が警戒の姿勢を取ると同時に、どんがらかつしゃんと音を立てて窓が砕け散った。

「き、きさま何て事を!？」

「え、いや、わたしまだ何もしてないわよ……ん？」

ふと涼子は床に転がっているものに気がついた。先ほどまではなかったものだ。これが窓を突き破ったものらしい。

「こらー、涼子ー!」

怒鳴りこんできたのは絵美だ。それに、涼子はぱくりとまばたきをする。

「あらら、死んでなかったの？」

「なんたる言い草だ!」

割れた窓から飛び込んできたのは、元気いっぱい怒っている絵美だ。何故かあちこち焦げているようだが、大きなケガはない。

「あの石像相手にするのはほんと大変だったんだぞ! 火い吹くは意外に俊敏だわやたらパワーあるわ石だからけっこう固いわで。ま、最終的には勝ったけどさ」

「ば、ばかな……六尾の像が貴様のような小娘にやられただと……?」

「うん。ほれ証拠だ」

そう言つて絵美は床に転がっているものを指差した。先ほど外から飛来して窓ガラスを粉碎した物体だ。

「なんかすごい音したと思つたら、いきなり吹っ飛んだぞ、その首」
「なっ……！」

「あははっ。でもま、楽しかったかな」

そこに転がっていたのは六尾の像の首に、山田君がきめんに動揺する。表情がない無機物だが、声は感情豊かでわかりやすい。
涼子はむろんその隙を見逃さなかった。

「いくわよ、絵美」

「へ？」

「くっ、ま、待て……ぐわっ」

山田君は涼子をとつさに止めようとしたが、覚めきれない動揺から動きに切れのない。涼子は山田君を思いつきり突き飛ばす。

「じつちよー！」

ぱしつと絵美の手をとつて、涼子は夜の廊下をかけたした。

三歩歩いたら忘れる鳥頭ですか（後書き）

六尾の狐の像：校門脇に飾られている石像。横幅一メートル半、縦二メートル強と中々に巨大。小学校の二宮金次郎さんみたいなもの。何故あるのかは不明。誰が作ったのかも不明。生徒からはコッコちゃんの愛称で親しまれており、よくバカな男子がコッコちゃんにまたがっては教師に怒られている。

夜には学校を守る最強のガーディアンとなる。重い、固い、そのくせ素早い、その上に火を吹くとあって、夜の学校七不思議を探りたい七研部にとってみれば最初にして最大の敵。けれど心優しい石像なので、あまり怪我をさせない程度には手加減してくれる。戦っても死にはしない。

なぜ動くかを考えたら負け。

お礼って大事ですね

「ねえ涼子」

「なに、絵美？」

廊下を駆けながら、絵美が話しかけてきた。すぐ傍だった階段は諦めて、少し遠くにある階段に向かっているのだ。

「何で理科実験室の人体模型の山田君とガイコツ標本の花子さんが動いてたの？」

「……はあ」

なるほど素朴な疑問だが、七不思議研究部の部員としては相応しくない質問だ。

「今日、あんたに不当な使われ方をしたって怒って動き出したのよ」

「まじで!？」

「……夜の学校七不思議よ」

「おお!」

ほっといたら本当に信じてしまいそうなので訂正する。

絵美がぽんと手を打った。

「なるほどね。夜の学校を徘徊する人体模型か。七不思議の鉄板だよね!」

正しくは『巡回する』だ。

「……あんたやっぱり来る前に夜の学校七不思議を調べてなかった

わね？」

「うん」

絵美は小難しい作戦を考えるタチではない。行き当たりばったり力技で切り抜けるのが彼女だ。案の定悪びれもなく頷いた。

「そう」

まあ、涼子が資料を独占したのも一因ではあるのだから深くは追及しない。それに今回に限って言えば都合がいいのだ。バカとハサミは使いよう。六尾の像の時だって、あれが侵入者排除の為に動きだすということを知らないからこそ罠にできたのだ。

「ま、いいわよ。それよりそろそろ階段よ。上に行くわよ」

「それより涼子、あたしに言うことあるだろ。ほれほれ」

「ああ」

絵美のわざとらしい催促に頷く。確かに言い忘れていたことがあったのだ。

「絵美」

顔をきちんと合わせて、人として言わなくてはならない言葉を告げる。

「罠になってくれてありがとう」

「開き直ってやがる！？」

ちゃんと礼を述べたというのに発せられた絵美の大声に、顔をしかめる。

「え、なにようるさいわね。言うべきことはしっかり言っただでしょう」

「いや違うから！　だれがお礼をいえつつった！？　謝れつつってんの！」

「あ、絵美。階段よ。早く上りましょう」

「無視か！」

「……」

「あ。さーらーに無視？」

「……」

「まーたまた無視い！？」

「うぎ……」

うるさい文句がふと途切れたのは、階段の踊り場を切り返したところだった。

「何だこれ……」

絵美は階段を見上げて呆然と呟いた。

「上が見えない……？」

「そりゃあねえ。夜の学校七不思議、その三　」

かんかんと小気味よく階段をのぼりながら涼子は答える。その階段を見上げるが、ずらりと続く階段は終わりが見えないほどに長い。あからさまに異常な事態だ。

「無限に続く二階への階段」

「ええー！」

絵美が悲鳴をあげた。

「無限ってことはこれが延々と続くわけ！？ のぼっても無駄なの！？」

「足を止めない！」

「うひゃい！」

止まろうとした絵美を叱咤する。涼子の一喝に絵美は慌てて走り出し、意図的にペースを落とした涼子を抜いていく。

「はいはいっと。怖いんだから。でも、実際どうするんだ、これ。施設変質型の七不思議じゃん」

七伏木高校の余りに多い七不思議はその七不思議の現象によっていくつかに分類されている。そして施設変質型とは、その名の通り学校施設がある条件で変容する七不思議だ。山田君や六尾の像の場合には備品起動型という。

施設変質型は、そこに入ってしまったら絶対のルールが存在する。絵美のような力破りが得意な人間には不向きなのだ。さばり魔の絵美もそれぐらいは覚えていたらしい。

そして七不思議で無限と記述されるからには、この階段に終わりはない。物理法則？ なにそれおいしいの？ が七不思議の基本スタンスなのだ。

だが涼子は慌てず騒がず答えた。

「大丈夫よ。部長が攻略法を編み出しているわ」

「おお、どうするの！」

「こうするの」

涼子にはっこりほほ笑んだ。慈母のような聖母のような笑顔。そ

のまま少し前を走っている絵美の足をひつつかんだ。

「は……ぐべっ！」

当然絵美はすっ転ぶ。勢いよく走っている最中、不意に足を掴まれたのだ。階段の角で額をしたたかに打ちつけた。

だが涼子は走るペースも進路も変えない。慈悲も容赦も見せず、そのまま絵美の体を駆け抜けた。

「ぐっ、ぎゃっ、べっ!？」

「よっ、こらっ、せいっ」と

追い打ちをかけるように絵美の体を踏みつける。太ももを踏み背中を踏み頭を踏み、勢いをつけて宙を飛んだ。足を踏み出すたびに、潰れたカエルのような鳴き声が聞こえた気がしたが、きつと気のせいだ。

宙を飛ぶ最中、ちろりと下を見おろす。絵美は車に轢かれたカエルのようにぺしゃんこにつぶれていた。

「階段を、のぼらなければいいのよ」

例えば階段に板を置きその上を走る。例えば十三段分をひと飛びで越える。そうするだけで、この上り階段の無限スパイラルから抜けられる。絵美の身長は大体百六十センチほど。その身体を駆け抜けければ、あとは五段分ほど飛べばいい。

とん、と無事二階の廊下に着地した涼子はふと思い出して階段を振り返った。上から見る限りは普通の階段だが、そこにいるはずの絵美は見えなかった。

「踏み台になってくれて、ありがとう」

またうるさく言われたらかなわないと、聞こえない礼を残して次の七不思議に向かった。

お礼って大事ですね（後書き）

・山田君

小学校とか中学校によくある、あの人体模型。模型だし性別は存在しないのだが、半分だけ存在する顔の絵が男っぽいので君付け。高校の授業で人体模型を使う機会があるはずもないのに、なぜか置いてある。大半の生徒からの評価は「キモい」の一言で済む。

夜になったら動く。しかもしゃべる。その上、ややウザい性格をしている。なぜ動く考えたら負け。

・花子さん。

骸骨標本。山田君ときたら花子さんしかないという理由で命名。王道のネーミングを取られ、トイレにいる幽霊が泣いているとかいないとか。骨盤がエロいとごく一部の男子から評判。大半の生徒から「山田君に比べればずっと可愛い」と言われる、ちょっとした人氣者。

夜になると動く。しゃべれるけれどもちよつとシャイな性格なのでめったに話さない。なぜ動くか考えたら負け。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0850x/>

学校を壊そう！

2012年1月5日18時54分発行